



痛みを共有して下さって

〈千葉県〉

宮内 みやうち みずほ 瑞穂 70歳

昭和48年1月24日早朝、一日中苦しんだ陣痛の痛みから、ようやく私は解放された。この世に生まれ出た途端に

「おぎやあ、おぎやあ」と激しく泣きじやくる長男の産声。真っ赤な顔をして、それはまさにお猿さんにそっくりだった。

助産師さんが産湯を使った後に、白いベビー服を着せたわが息子を抱っこした。寝ている私の顔のすぐそばに、長男を近づけてきて「おめでとー！ お母さんになりましたね。本当に良くがんばりました。ほらとても元気な赤ちゃんですよ」。なんと優しい温かい言葉。母になったという感動がジーンと私を包み込む。

「二晩中見守ってくださいって、ありがとうございました」。顔中涙でぐしよ

ぐしよになりながら、手渡されたネームバンドを息子のその小さな足首に取り付けた。

その時である。助産師さんの腕の血管が、一部ドス黒く浮き上がっているのに、私はハツとした。「ひよっとして、それは……」

痛々しい助産師さんの前腕部分。波のように次々と襲ってくる陣痛の鋭い痛み能耐えかねて、そばで励ましてくださっていた彼女の腕を、思わず私は思いつき強く握りしめてしまった。ベッドの柵があつたにもかかわらず、柵を握らずにひたすら助産師さんの腕を、握りこんで離さなかった。

「ごめんなさい。痛かったですよ」。心から謝った。

「いいんですよ。私もお母さんと一緒に、

赤ちゃんが生まれてくるのを、腕の痛みに耐えながら、共にがんばれたんですもの」

心温まる優しい言葉を返して下さった。

長男が誕生したあの時から、半世紀に近い時が流れた。その長男に女の子ができ、私は祖母になった。かわいい孫を見ていると、あの出産時の、陣痛の痛みを共有して下さった、助産師さんを思い起こす。そっと机の引き出しの奥から、当時の母子手帳を取り出してみた。少々紙が変色してはいるが、助産師さんのサインが輝いて見えた。